

# 家庭誌にみる育児の変遷について

## — 大正時代から現在までの躰け観 —

○宮田早苗

(川村学園小倉台幼稚園)

栗原泰子

(川村学園女子大学)

### I. 研究目的

いつの時代でも「親の躰けがなっていない」と年配の人は、若い親に対していっている。しかし現在は、「親の躰けさえも欠乏している」というようなことが聞かれるようになった。こうした状況を表して、「躰けなき時代」という言葉も生まれているほどである。

年配の人が、「昔の躰けは厳しかった」と言うのをよく耳にするが、この「躰け」の意味は現在と相違があるのではないかと感じるようになってきた。そこで本研究において、躰けの変遷を子育ての参考にされている家庭誌から明らかにしていく。

### II. 方法

雑誌の内容分析により躰けの変遷を見出していく。

雑誌は主婦の友社から発行されている月刊家庭誌、『主婦の友』の昭和初期～平成2年と同じく同社の月刊家庭誌、『COMO』の平成2年～平成6年に至るまでの68年間分を分析対象にする。

記事の選出・分析方法としては、「躰け」、「家庭教育」、及び「入園・入学準備」がキーワードとして含まれているタイトル記事、合計111を選出し、KJ法を用いて分析した。具体的には、記事の中の躰けに関するものと思われる理論や実践を全て抽出する。

以上のようにして書き抜いたカードをグルーピングし、時代ごとの躰けの特徴を挙げていく。

### III. 結果および考察

雑誌を分析していくにあたり、以下のような項目に分類することができた。

①子ども像 ②母親像 ③躰け・子育て観 ④基本的生活習慣 ⑤社会性 ⑥遊び ⑦勤労 ⑧知的教育 ⑨叱る・褒める ⑩その他である。

さらにこれらの10項目を各年代ごとに分類していくと、それぞれの特徴が出てきた。

しかし、④基本的生活習慣～⑧知的教育と⑩その他の具体的な事項については多少の目立った特徴あったが、各時代に共通点が多く見られた。そこで、今回は各時代において変化がみられる、①子ども像、②母親像、③躰け・子育て観の抽象的な事項に注目してい

こうと思う。時代背景から照らし合わせてみても、大きく3つの時代に分かれた。本研究においては、その時代ごとのしつけ観を、子ども像と母親像を合わせながら特徴をまとめていく。

#### A. 戦前・戦後の時代

この時代は、戦争が影響してか「敬う精神」に重点を置いた躰けが中心にされていた。ほとんどの記事に「天皇陛下を尊敬する」や、「親を尊敬する」、「毎朝は、神仏の礼拝から始まる」といった敬う精神を幼いころから身につけさせることが挙げられていた。また、戦時中に生き抜くために、精神力、忍耐力、根気といった「強固な精神」も大切とされていた。

そして、母親像も親としての威厳を持つことを始めとし、「明るく強く」や「欠乏を喜び耐える母の態度が大切」というように子どもの手本になることを強調していた。

躰け・子育て観については、「家庭は国家の基礎を作る」、「子どもの躰けも、国の中の一つの働き」と家庭教育を重視している。

この時代は躰けは特別なものではなく、「家風に基づいた躰け」や、「お国に役立つ人に育てる」といった明確な目標により行われていた。そのために、特に幼児の躰けを細かく取り上げる必要はなかった。

幼児は生活や、遊びの中から色々なことを学んでいくといわれていた。躰けは、小学校にあがってから本格的に厳しくするものであったようである。

#### B. 戦後から東京オリンピックまでの時代

戦争が終結し、「国家主義」から「民主主義」へと時代が大きく変わり、「人間性・人格」に重点に置いた躰けが中心にされていた。この時代の子どもに求められるものは、「他人に対して心を広く持ち、何でも受け入れていくことができる」、また「人の過ちをとがめることをせずに、許せるような広い心を持つ」、さらに「他人と仲良く調子をそろえて、物事を行っていく」ことであった。躰けにも、平和な世の中を望む思いが現れている。何もかも国家中心に動いてきた時代への反論とも感じられる。

また、母親像にも変化が見られる。「子どもを理解する」、「子どもと話し合う」といったように子ども

を主として、考えていくようになってきた。もし、子どもに問題が起きたら、母親はまずはその原因を考える。そして母親は、心と心で話し合うことで子どもの気持ちを理解でき、真面目な話し相手になるとされている。

躾け・子育て観については、「日本の再建設には家庭教育」、「子どものために躾ける」、「早くから躾ける」といわれるようになってきた。

この時代より、早くから基本的生活習慣を身につけるために躾けをするようになってきた。そのため、躾けは幼い子を対象とした、「基本的生活習慣の体得」を意味するようになんて変わってきた。

#### C. 東京オリンピックから現在までの時代

先の時代の流れからこの時代は、「興味・関心」や「豊かな性格」というように、子どもの個性を伸ばしていくことが重要視されるようになってきた。また、「自信」や「意欲」ということから、子どもを尊重していることが分かる。

母親像も変わってきた。「子どもの理想像をつくらなように」や、「親が思うようには子どもは育たない」ということが書かれるようになってきた。このことは、子どもに向けられてきた目が期待となり、子どもの高い理想像というものを母親が持っている影響であらうと思われる。

また、親子に「深い愛情と信頼感」を求めるようになった。記事の所々には「愛情」という言葉が出てきており、さも愛がなければ、躾けはもとより子育てはできないというような印象まで感じられた。

躾け・子育て観も「躾けは応用である」や、「躾けも変化する」というように、躾けに対して多様化した考えが現れてきた。躾けには規範というものが無くなりつつあり、母親自身の価値観によってなされるという傾向が見られる。

この時代の特徴として、躾けは「基本的生活習慣」や「社会性」を身につけることを重要視するようになった。これらは、母親が実際に子どもを躾けていくにあたって、子どもが身につけたことが目に見えて分かるものである。このように具体的な躾けを、母親たちは躾けと捉えるようになってきた。しかし、躾けが軽視されるような雰囲気はなく、母親なりに育児不安の中、一生懸命に子どもを躾けている様子が伺われた。

育児雑誌ブームが起こった90年代からは、躾けは「子どもが幼稚園や小学校にあがるためにするもの」という傾向が強くなってきており、基本的生活習慣が2月、3月に特集として組まれるようになってきた。

しかしそこには、かっこ付けで「完全にできなくてもよい」と書かれるようになった。

さらに近年の傾向として、「早期教育」も躾けの中で取り挙げられている。母親の関心は早期教育に向けられているようにも思えた。

#### IV. まとめ

昭和の初期から現在に至るまでの躾けの変遷をみてきたわけだが、躾けの大きな変化は、精神修養にあるのではないかと思われた。戦前の「敬う精神」というのは、戦争が影響していたとはいえ、広く人と関わる精神を身につけていったのではないかと思われる。天皇陛下を崇拝したり、父親に感謝する精神により生活を送るといった、第三者を視点に置いての躾けをしていたのである。これに対し、戦後は「人間性・人格」、東京オリンピック後からは「個性」を重視というように徐々に精神修養は、他者へ対してから自己を中心とするものへと狭いものとなっている。そのことに伴い、躾けの意味する範囲も広義から狭義に解釈されるようになったと考える。

また、躾けが低年齢化しているのは、子ども観や子どもを取り巻く社会状況が大きく影響しているためと思われる。戦前は「七つ前は神の子」というように、躾けは7歳以上の子どもから本格的にするものであると考えられていた。そのため、年齢に応じた厳しい躾けがされていった。それに対して戦後は、躾けは幼い子どもにするものであると考えられるようになってきた。そして、具体的な基本的生活習慣の自立を躾けとしてとらえるようになったためと考える。

本研究において、戦後から幼児期を過ぎた子どもに対しての本格的な躾けが行われていないことが、家庭誌においては明らかになった。幼児期を過ぎた子どもに対しての躾けの情報が途切れてしまっている状況に置かれているのである。このことから幼児期以降の躾けが一般的にも軽視されているといえよう。「躾けなき時代」といわれる訳がここに現れているのではないかと思われた。

現在は過去から見ると、将来に明確な目標を持たずに子育てをしている時代だと思う。そして、親は子どもを「後ろ指さされない人」に育てる、といった責任をもった子育てをしなくなってきた。また、子ども自身も周りの人から認められる「一人前になる」という、努力をしなくなってきた。このことが、現在問題とされている、「生きる力」へとつながってくるのではないかと感じた。